スタンフォードでのかけがえのない出会いと体験

産業医科大学病院　吉塚伸行

2013 年度海外研修派遣に参加し，スタンフォード大学において大変貴重な体験をすることができた．以下にこの研修の報告書を与えられた 4 つテーマに沿って記す．

1．本研修に期待した事とその成果

私がこの研修に期待したことは，海外での研究への取組みを肌で感じ，自身の研究に対するモチベーションを向上させることであった．実際に講義や施設見学を通して，最新の研究や臨床について多くの情報を得ることができ，非常に充実した一週間であった．その中でスタンフォード大学でも力を注いでいる分子イメージングは革新的で，今後さらに普及する技術であると期待させられた．分子イメージングの世界に興味が湧き，研究や臨床に携わりたいと思うようになった．また現在行っている自身の研究を見直しよりクリエイティブな研究を行っていきたい．

2．日米の診療放射線技師の違い

日本の放射線技師資格は全モダリティが扱えるため，広い視野を持てるという利点がある．アメリカではモダリティ別に専門のライセンスを取得する必要があり，取得後はそのモダリティに専従し，専門家として認められている．そのため専門性の高い技術を提供する環境が整っているものと感じた．日本でも各々で高い専門性が求められており専門技師制度などが推進されているが，まだ制度としては不完全であると思われる．今後さらに高度化・細分化する医療技術に対応するために日本の長所を伸ばしつつアメリカのライセンス制度の良い部分を取り入れ，日本にあった制度を確立することが必要であると考える．

3．診療放射線技師の国際的視野

研修中，学会の国際化についてグループ討論を行った．私のグループでは，国際化の目的について考察し以下の二つを挙げた．一つ目は先端技術の収集を行い，収集した情報を基に新たな技術を創造し，それを世界に発信することである．二つ目は多くの医療職が国際化を推進している中で放射線技術学を担う我々が対等な立場を維持し医療チーム連携を推進・主導していくことである．今後その方法を学会レベル，大学レベル，臨床レベルが連携し一人一人が真剣に考え，取り組んでいかなければならない．将来構想として，医療産業の開拓と熟成を行い先進技術の創造すること，病院事業への参画，教育やインフラ整備を行いアジアのハブ病院になることなど活発な意見交換が行われた．短い時間ではあったが海外の地で行われた研修者たちとの討論は，私にとって国際化について考えるいい機会となった．

4．本研修での経験を今後の活動にどのように活かすか

この研修を通して知識や経験，そして良き仲間を得ることが出来た．日本から共に参加した 8 期の研修生たちはそれぞれが置かれる境遇は異なっているが，全員が臨床・研究・教育に対し高いモチベーションを持って日々の業務に臨んでおり，彼らとの出会いは私にとって大きな刺激となった．今後は日本の放射線技術学を担う者として共に切磋琢磨し，時には背中を押してもらい，時には競争心を持って，今以上に研究や臨床業務に励んでいきたい．そしてその成果を国内外に発信できる様に努力を続けていく所存である．

Moseley 先生とチーム R のメンバー，
右から 2 番目が著者